

2012 年度日本人口学会大会企画セッション

企画セッション 1 : 「世代とジェンダーからみたライフコースと家族関係 : JGGS パネル・データによる分析」

趣旨 : 本セッションは、2004 年に実施された「結婚と家族に関する国際比較調査 (JGGS)」および 2007 年と 2010 年に実施されたそのフォローアップ調査から得られるパネル・データを用いて、「世代とジェンダー」の視点からライフコースを形成する主要イベントおよび家族関係について多面的に検証することを目的とする。ジェンダー関係については、出産・子育て母親の就業、および就業と家庭内役割分担に焦点をあて、世代間関係については、同居と世代間支援および高齢期の親子関係を中心に報告する。予定される報告者と報告テーマは以下のとおりである。

組織者 : 津谷典子 (慶應大学)

報告者 (案) :

- ① 菅 桂太 (国立社会保障・人口問題研究所) 「第 1 子出生後の就業継続のコーホート比較」
- ② 吉田千鶴 (関東学院大学) 「ライフステージと世帯内役割分担」
- ③ 中川雅貴 (早稲田大学) 「居住形態別にみた世代間支援パターン」
- ④ 岩間暁子 (和光大学) 「ジェンダーと社会階層からみた高齢期の親子関係と家族機能」

討論者 : 未定

企画セッション 2 : 「寿命・健康研究の複合的展開」

組織者 : 石井太 (社人研)

座 長 : 河野稠果 (麗澤大学)

報告者 :

- (1) 泉田信行 (社人研)・野口晴子 (同)・菊池潤 (同)・田宮菜奈子 (筑波大学)
- (2) 齋藤安彦 (日本大学)
- (3) 鈴木隆雄 (国立長寿医療研究センター研究所)
- (4) 須田斎 (東海大学)
- (5) 中込信之 (三菱 UFJ 信託銀行)・肥高昌憲 (東京海上アセットマネジメント投信株式会社)

趣旨 : 人類の寿命は 20 世紀に飛躍的な伸長を遂げたが、先進諸国では 19 世紀から 20 世紀前半にかけて、「疫学的転換」と呼ばれる若年死亡率低下が主に寿命伸長に寄与したのに対し、近年では中高年死亡率低下の寄与が顕著であり、高齢期の長期化によって寿命が伸長する構造へと変化を遂げてきた。このような長寿化の構造変化により、寿命伸長の背景となる社会・経済要因の分

析や、高齢期の長期化が社会に与える影響評価に関する重要性が増しているとともに、量的に増大した高齢期の生存の質の向上の観点から、人口学領域においても健康研究の必要性は高まっている。

こういった課題に対して、伝統的な人口学的方法論の延長に留まらず、異分野との積極的連携によって、問題を新たな視点から解明しようとする複合的展開が試みられてきている。例えば、生物学的観点に基づき加齢による死亡メカニズムを解明するバイオデモグラフィや、経済学的視点と人口学の寿命・健康研究を組み合わせる経済人口学的アプローチなどが例として挙げられる。また、アクチュアリーの実務領域では、近年、年金債務の算定基礎となる将来死亡率の動向や、その変動リスクを表す長寿リスクなどの概念が国際的にも注目されており、実務領域と人口学の学術領域との接合による新たな研究の発展も期待される。しかしながら、わが国において、このような複合的展開はまだ豊富に例があるとはいえない状況にある。

本セッションでは、人口学、医療経済学、医学、生物学の専門家、及び実務領域で活躍するアクチュアリーに、それぞれ健康・寿命に関する報告を依頼し、これらを踏まえた総合的な討論を行うことにより、寿命・健康研究に関する複合的展開の活性化を目指す。

企画セッション3：「災害常襲地の歴史人口と人口変化」

組織者：村山 聡（香川大学）

座長：鬼頭 宏（上智大学）

討論者：原宗子（流通経済大学）：中国環境史の観点から

討論者：渡辺和之（立命館大学）：文化人類学の観点から

1. 東昇（京都府立大学）・村山聡（香川大学）「近世日本の災害と住民の意識」
2. 葛剣雄（復旦大学）「中国史上の巨大災害が人口に及ぼした影響」
3. 溝口常俊（名古屋大学環境学研究科）「バングラデシュの洪水と人口変化」

趣旨：災害は人口現象にどのような影響を与えるのか。直接的に死傷者を生むことも当然あるが、災害の経験は残された人々にも強い影響を与えることが考えられる。前近代社会においては、洪水のように常態化していた災害においては死傷者が出ることは希であるし、また、現代のバングラデシュのように雨期と乾期が繰り返され、やはり「洪水」が日常であるような場合にも、むしろ柔軟な住民の対応が目立つ。つまり、自然災害イコール死傷者という構図は必ずしも成り立たない。しかし他方で、疫病等の蔓延はやはり決定的な人口減少を生じさせるし、繰り返される自然災害ではなく、数百年に一度起こるような巨大災害においては、事情は異なる。

自然に起因する様々な災害は、災害の起こった時空間を越えて、人口現象に大きな影響を与えているのではないだろうか。そこで、近世日本、中国史、そして、現代のバングラデシュを対象時空間として取り上げ、「災害常襲地」という歴史環境的前提を踏まえた場合に、歴史的にどのよ

うな人口現象が観察できるのか、また、どのような人口変化をその特徴として見出すことができるのか。これらの点に関して三つの報告を用意している。第一に、近世日本について、災害はどのように捉えられ、実際にどのような人口現象への影響が見られるのか、第二に、中国における巨大災害は人口現象にどのような影響を与えていたのか、そして最後にバングラデシュで常に観察される増水・洪水は、その地域にどのような人口変化を生み出していたのか。これらの三つの報告を受けて、中国環境史の観点と文化人類学的な観点から、報告から得られた論点とエビデンスに関してのコメントを頂き、このテーマに関する有意義な討論の機会を見出したい。